

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成16年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

下志柄遺跡 (平16地点)

笹原遺跡 (平16A地点)

笹原遺跡 (平16B地点)

大袋城跡 (平16地点)

北近藤第一地点遺跡 (平16地点)

栄町遺跡 (平16地点)

諏訪北遺跡 (平16地点)

南近藤遺跡 (平16地点)

館林市教育委員会

館林市内遺跡発掘調査報告書

— 平成16年度各種開発に伴う埋蔵文化財調査 —

下志柄遺跡（平16地点）

笹原遺跡（平16A地点）

笹原遺跡（平16B地点）

大袋城跡（平16地点）

北近藤第一地点遺跡（平16地点）

栄町遺跡（平16地点）

諏訪北遺跡（平16地点）

南近藤遺跡（平16地点）

館林市教育委員会

例 言

- 1、本書は、平成16年度に国宝重要文化財等保存整備事業、群馬県文化財保存事業の補助金を受けて実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
- 2、本書において報告する遺跡名は、「遺跡台帳」に基づき次のとおりである。地点名は、平成16年度調査であることから、「平成16年度調査地点」とする。なお、笹原遺跡については今年度2箇所調査を行ったため、「平成16年度調査地点A」（平16A地点）と「平成16年度調査地点B」（平16B地点）に区別する。

下志柄遺跡（しもしがらいせき）

笹原遺跡（ささはらいせき）

大袋城跡（おおぶくろじょうせき）

北近藤第一地点遺跡（きたこんどうだいいいちちてんいせき）

栄町遺跡（さかえちょういせき）

南近藤遺跡（みなみこんどういせき）

- 3、発掘調査及び資料整理は、館林市教育委員会が主体となり実施したもので、調査組織は次のとおりである。

教 育 長 大塚 文男

教 育 次 長 三田 正信

主 管 課 文化振興課

文化振興課長 中村 慎六

文化財係長 阿部 博

学 芸 員 岡屋 英治（担当） 阿部 弥生 原 幸恵 吉田 紋乃

主 事 釜島 美貴

主 事 補 吉村 昭和（副担当）

- 4、作業員

石井 悦雄 坂田 岩吉 高瀬 廣 小林 俊彦 吉田 敏雄 松本 啓

三田 雅敏 小倉 平住 佐々木晋也 小林資樹雄 高野 宜秀 田中 陽子

- 5、調査による出土遺物、調査記録及び資料は、館林市教育委員会で保管している。

- 6、本書の編集・執筆については、岡屋、吉村が中心となり行った。

- 7、調査の実施および本書の刊行にあたり、下記の諸氏、諸機関のご協力を頂いた。ここに記して感謝申しあげる次第である。（順不同、敬称略）

中里 寛 坂村 孝 鎌田しづ江 鎌田 育男 鎌田 均 渡邊 清美

桜井 和枝 曾根 幸 長谷川正雄 長谷川雪江 高羽 圭子 仙田 哲男

澤口 宏 飯森 康広（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 黒澤 照弘（同左）

館林市都市計画課 館林市駅西区画整理課 館林市史編さんセンター

< 目 次 >

例 言

目 次

図版目次

写真目次

第1章 館林市の環境

- | | | |
|---|-------|---|
| 1 | 地理的環境 | 1 |
| 2 | 歴史的環境 | 2 |

第2章 調査の概要

- | | | |
|---|----------------------|----|
| 1 | 下志柄遺跡 | 4 |
| 2 | 笹原遺跡 (平16A地点・平16B地点) | 7 |
| 3 | 大袋城跡 | 10 |
| 4 | 北近藤第一地点遺跡 | 13 |
| 5 | 栄町遺跡 | 16 |
| 6 | 諏訪北遺跡 | 19 |
| 7 | 南近藤遺跡 | 21 |

抄 録

< 図 版 目 次 >

第 1 図	館林市の位置	1
第 2 図	館林市の地形概念図	3
第 3 図	調査遺跡	3
第 4 図	下志柄遺跡 周辺の遺跡	4
第 5 図	下志柄遺跡 トレンチ配置図	5
第 6 図	下志柄遺跡 出土遺物実測図	6
第 7 図	笹原遺跡 周辺の遺跡	7
第 8 図	笹原遺跡 (平 1 6 A 地点) トレンチ配置図	8
第 9 図	笹原遺跡 (平 1 6 B 地点) トレンチ配置図	9
第 10 図	大袋城跡 周辺の遺跡	10
第 11 図	大袋城跡 トレンチ配置図・遺構確認図	12
第 12 図	北近藤第一地点遺跡 周辺の遺跡	13
第 13 図	北近藤第一地点遺跡 トレンチ配置図	14
第 14 図	北近藤第一地点遺跡 トレンチ平面図	14
第 15 図	北近藤第一地点遺跡 遺構確認図	15
第 16 図	北近藤第一地点遺跡 出土遺物実測図	15
第 17 図	栄町遺跡 周辺の遺跡	16
第 18 図	栄町遺跡 トレンチ配置図	17
第 19 図	栄町遺跡 遺構確認図	17
第 20 図	栄町遺跡 出土遺物実測図	18
第 21 図	諏訪北遺跡 周辺の遺跡	19
第 22 図	諏訪北遺跡 トレンチ配置図	20
第 23 図	南近藤遺跡 周辺の遺跡	21
第 24 図	南近藤遺跡 トレンチ配置図	22
第 25 図	南近藤遺跡 出土遺物実測図	22

< 写真目次 >

写真 1	下志柄遺跡 調査前景観	5
写真 2	下志柄遺跡 調査風景	5
写真 3	下志柄遺跡 トレンチ全景	5
写真 4	下志柄遺跡 出土遺物	6
写真 5	笹原遺跡(平16A地点) 調査前景観	8
写真 6	笹原遺跡(平16A地点) 調査風景	8
写真 7	笹原遺跡(平16B地点) 調査前景観	9
写真 8	笹原遺跡(平16B地点) トレンチ完掘	9
写真 9	大袋城跡 調査前景観	11
写真10	大袋城遺跡 遺構確認状況	11
写真11	北近藤第一地点遺跡 調査前景観	14
写真12	北近藤第一地点遺跡 トレンチ完掘	14
写真13	北近藤第一地点遺跡 遺構確認状況	14
写真14	北近藤第一地点遺跡 出土遺物	15
写真15	栄町遺跡 調査前景観	17
写真16	栄町遺跡 トレンチ完掘	17
写真17	栄町遺跡 遺構確認状況	17
写真18	栄町遺跡 出土遺物	18
写真19	諏訪北遺跡 調査前景観	20
写真20	南近藤遺跡 調査前景観	22
写真21	南近藤遺跡 トレンチ完掘	22
写真22	南近藤遺跡 出土遺物	22

第1章 館林市の環境

1 地理的環境

館林市は、群馬県の南東部、関東地方のほぼ中央部に位置する人口8万人ほどの地方都市である。市域は、東西約15.5km、南北約8.0kmと東西に長く、総面積は約60km²である。北は一部を除き渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町、南は谷田川を隔てて邑楽郡明和町にそれぞれ接している。明和町の南には利根川が東流し、県境となっている。県庁所在地である前橋市までは約50km、首都東京（台東区浅草）へは約65kmの距離にあり、首都圏との結びつきも強い。

群馬県の東南部は、「邑楽・館林」地方と呼ばれ、群馬県のなかでは低地に位置している地域である。館林市の標高は、15m台（大島町東部）から32m台（高根町）であり、おおむね平坦であるといえる。

本市の地形を概観してみると、その地形は、大きく「低台地」と「低地帯」に分けることができる。市域のほぼ中央部に「低台地」が東西に延びるように所在し、その周辺に「低地帯」が広がっている。

この「低台地」は、「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地であり、太田市高林から本市中央部を東西に延び、隣接する板倉町まで続いている。また、大泉町古海から館林市高根に至る台地の北側に沿って、わが国最古の砂丘のひとつである埋没河畔砂丘が走っており、本市最高標高点はこの上にある。

「低地帯」は、おもに利根川や渡良瀬川によって形成された沖積低地である。台地北側の低地帯には、旧河道、微高地や自然堤防が目立ち、一方、台地南側の低地帯では、茂林寺沼をはじめ大小の沼や湿地帯が形成されている。

こうした台地や低地などからなる本市の地形は、北西から南東へ向かって緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面の比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。

「邑楽・館林台地」と呼ばれる洪積台地は、沖積台地へ延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。そのなかでも市内最大の谷は、本市中央部を東流する鶴生田川から城沼にかけてのもので、台地を南北に二分している。こうした洪積台地を開析する谷には、他にも茂林寺沼、蛇沼、近藤沼などの池沼を伴うものが多く、本市景観の特徴のひとつになっている。



第1図 館林市の位置

2 歴史的環境

館林市内に所在する遺跡は、145ヶ所である。昭和63年刊行の『館林市の遺跡』（市内遺跡詳細分布調査報告書）には、そのうちの144ヶ所について詳細が報告されている。

分布調査による採集遺物から大別した、各時代の遺跡数は次のとおりである。

旧石器時代の遺跡3遺跡、縄文時代の遺跡13遺跡（縄文土器のみ採取できた遺跡）、弥生時代の遺跡は0（弥生時代の遺物を採取できた遺跡1遺跡）、古墳時代～平安時代の遺跡（土師器の出土した遺跡）96遺跡（うち縄文時代の遺物も採取できる遺跡は23遺跡）、古墳は17遺跡（古墳総数25基）、中世生産址1遺跡、中世城館址12遺跡、近世城館址2遺跡である。（ただし、複合した時代の遺物散布地が見られるため、その中心になると考えられる時代でまとめたものである。）

これらの遺跡の分布は、地形的な特徴と大きく関わっていることが観察される。

館林市内に所在する遺跡の時代的変遷と地形的な関わりを概略してみると、次のようになる。

《旧石器時代》

この時代の遺跡は、市内の標高の高い地域に集中する傾向を見せる。邑楽・館林台地の北西に沿って、鞍掛山脈と地元で呼ばれる内陸河畔砂丘（自然堤防）上に、その多くが確認されている。

《縄文時代》

この時代になると、遺跡数が増えるとともに洪積台地上に営まれるようになる。

前期や中期の遺跡は、池沼や谷地を望む舌状台地上の平坦面に確認されることが多い。

後期以降は遺跡数は減少し、その所在は、台地の斜面から微高地に移る傾向がある。後・晩期の包含層等は低地（沖積地）におよぶ。

《弥生時代》

弥生時代の遺跡として確認されたものはないが、微高地や台地の斜面等で、遺物などがわずかに確認されている。

《古墳時代》

前期の遺跡は少ない。遺跡は、洪積台地の斜面からテラス状の微高地に所在することが多く、この傾向は、弥生時代の遺物散布に似ている。

中期には、遺跡の数が増えるとともに、その所在は、台地の斜面から台地上の平坦面へと移行する。

後期には、遺跡数は増大し、台地上の平坦部に所在する場合が多い。

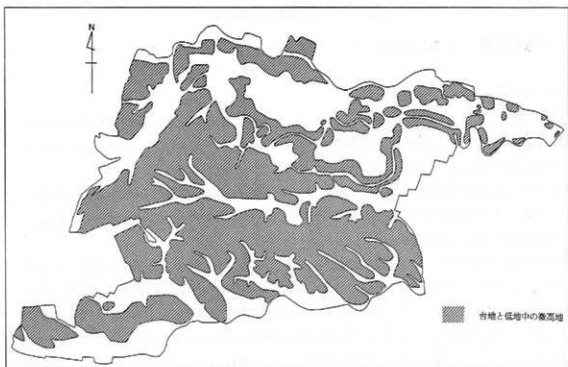
墳墓としての古墳は、25基が残存している。古墳群が2ヶ所あり、一つは日向地区を中心とする邑楽・館林台地上、もう一つは高根地区を中心とする内陸河畔砂丘上にある。その他単独のものも多いが、そのいずれもが、谷や谷地等をおろす洪積台地上に所在している。

《奈良・平安時代》

この時代の遺跡は急増する。台地の内部や全面で遺物の採取ができることから、この時代以降は台地上に普遍的に集落等が営まれてきたことを示唆している。

《中世・近世》

この時代の城館址については、伝説的な要素が多く実体ははっきりしないが、中世末には館林城が築かれ、現在の館林市の基礎となった。



第2章 各遺跡の概要

1 下志柄遺跡（平16地点）

【立地と環境】

下志柄遺跡は、館林市街地の東部、城沼から入り込む支谷である古城沼の東岸の高台に所在する縄文時代の遺物を散布する遺跡である。遺跡は、県道板倉榑谷・館林線と県道赤生田・山王線の交差点の西方約750mの所に位置している。

遺跡地は、地形的には呂桑・館林台地を大きく開析する城沼を北に、また城沼から南に向かって入り込む支谷である古城沼を西に望む高台に所在し、遺跡付近の標高は約20m、西側の古城沼の水面との比高差は約3.5mである。

本遺跡の周辺には、同じ台地上に、大袋4遺跡（縄文・平安時代）、下志柄古墳（古墳時代）、町谷1古墳（古墳時代）、町谷1遺跡（古墳・土師時代）等の古墳時代の遺跡や古墳が多く所在している。このうち、既往調査で住居址等が確認されているのは大袋4遺跡である。なお、大袋4遺跡については平成14年度に調査を実施したほか、これまで数回の調査が行われている。本遺跡の発掘調査は平成9年に一度行われており、その調査では溝状遺構2本と縄文土器、石器等が確認されている。今回の調査地は遺跡範囲の中央部に位置し、平成9年度調査地点の北方にあたる。



第4図 周辺の遺跡

【調査の概要】

本地点の発掘調査は、楠町字下志柄 1969-1 地内における運送会社倉庫建設に伴う事前調査として実施した。

調査は、計画地の地形にあわせ東西方向に4本のトレンチを設定し、土木重機により表土排除を行い、その後人力によりローム面まで掘り下げるとともに、遺構・遺物の有無の確認を行った。

調査の結果、調査地は、現地表面はほぼ平坦な地形であるが、旧地形においては、東方から西方に向けて低くなっていたことが判明した。

1 トレンチでは、地表から深度約 70 cm～80 cm のところでローム層が見られ、溝4条（近世）、土壌2基（時代不明）等が確認された。また1 トレンチ覆土より火山灰を検出し、浅間Aテフラ（As-A）と確認された。4 トレンチでは、地表から深度約 40～50 cm のところでローム層がみられ、溝1条（近世）、土壌1基（時代不明）などが確認された。

今回の調査では、遺構として全体で溝4条、土壌3基が確認された。



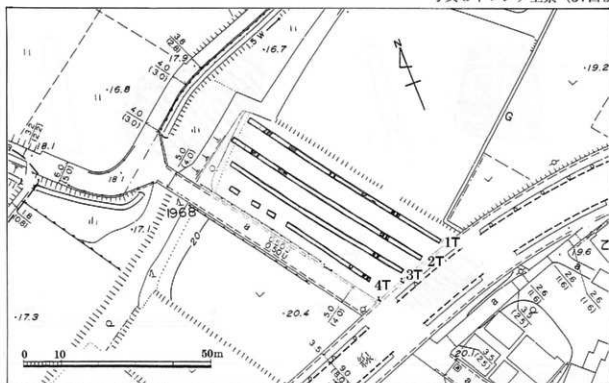
写真1 調査前景観



写真2 調査風景



写真3 トレンチ全景 (3T西より)



第5図 トレンチ配置図

【出土遺物】(写真4・図6参照)

出土遺物は、縄文土器片、須恵器片、土師器片等が出土した。

遺物1 (1トレンチより出土)

縄文土器深鉢口縁破片である。口縁下に3条の沈線がみられる。表面には斜縄文が施されている。色調は茶褐色である。器厚0.9cm。焼成は良好であり、繊維が混入していた。

遺物2 (3トレンチより出土)

縄文土器深鉢口縁破片である。波状口縁の可能性ある。表面に斜縄文が施されており、色調は灰黄茶褐色である。器厚1.0cm。焼成は良好である。繊維の混入がみられる。

遺物3 (2トレンチより出土)

縄文土器深鉢胴部破片である。表面に斜縄文がなされ。色調は茶褐色である。器厚0.9cm。焼成は良好で、繊維が混入している。

実測した遺物(遺物1～遺物3)は、いずれも縄文時代前期の所産である。

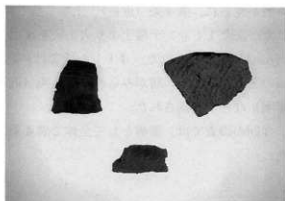
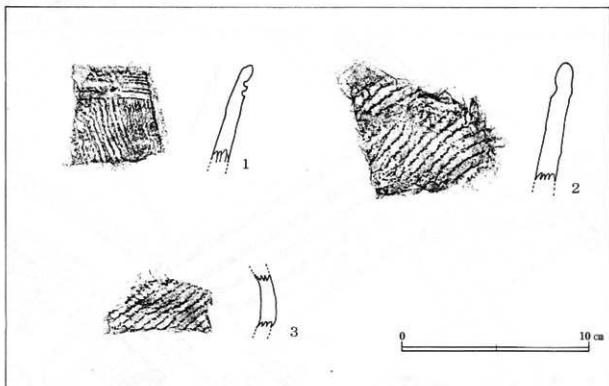


写真4 出土遺物



第6図 出土遺物実測図

2 笹原遺跡（平 16A 地点・平 16B 地点）

【立地と環境】

笹原遺跡は館林市街地の南部、茂林寺沼の西岸の舌状台地に所在する縄文時代と平安時代の遺物を出す遺跡である。笹原遺跡は東武鉄道伊勢崎線茂林寺前駅の北北東約 600m のところに位置する。

遺跡地は芭楽・館林台地の南辺を深く浸食する谷である茂林寺沼を東に臨む高台の東斜面に位置し、遺跡付近の標高は約 19m で茂林寺沼の水面との比高差は 2m ほどであるが、その境はなだらかに湿原へと連なっている。

茂林寺沼を取り巻く台地上には多くの遺跡が所在しており、本遺跡と同じ茂林寺沼西側の台地には、法正谷遺跡、中山東遺跡、前通遺跡（いずれも平安時代）等の遺跡が、東側の台地には、腰巻遺跡、咄戸遺跡、咄戸沼遺跡、美園町遺跡、大原道東遺跡（いずれも縄文時代）等の遺跡のほか、下堀工道満遺跡（古墳～平安時代）が所在する。

笹原遺跡ではこれまでに 4 回の調査が実施されており、昭和 58 年の調査では縄文時代中期の遺物が多量に出土している。平 16A 地点は、遺跡範囲の西端に位置し平成 10 年度調査地点の西に隣接する。平 16B 地点は、遺跡範囲の中央部に位置し、平成 9 年度調査地点の南に隣接する。



第 7 図 周辺の遺跡

【調査の概要】(平 16A 地点)

笹原遺跡(平 16A 地点)の発掘調査は、堀工町字笹原 1873-9、1875-19、1875-20 他地内において館林市により計画された館林市都市計画道路「茂林寺中通り線」道路改良工事に伴う事前確認調査として実施した。

調査は、道路建設予定区域に2本のトレンチ(南側より1~2トレンチ)を設定し土木重機により表土排除を行い、その後人力によりローム面まで掘り下げるとともに、遺構・遺物の有無の確認を行った。

調査区域は地表面では約20cmの高低差があり、西から東にかけて高くなっている。1トレンチでは地表から約80~90cm、2トレンチでは約70~80cmほど掘り下げたところでローム面を確認した。

今回の調査では、遺構としては比較的新しい時代の溝3条や、旧地割の落ち込み等が確認された。



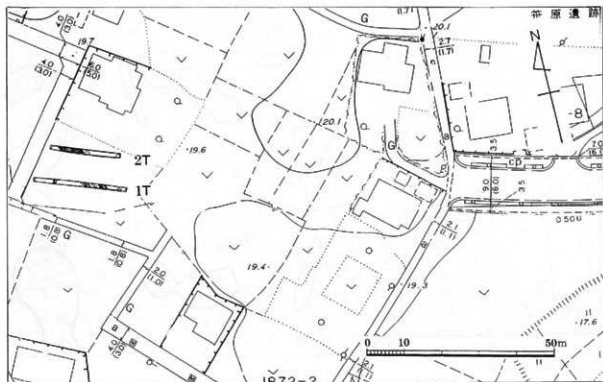
写真5 調査前景観



写真6 調査風景

【出土遺物】

出土遺物は、縄文時代の土器片が出土しているがいずれも小破片である。



第8図 トレンチ配置図

【調査の概要】(平 16B 地点)

笹原遺跡(平 16B 地点)の発掘調査は、掘工町字法正谷 1849・2 地内における農地埋め立て工事に伴う事前確認調査として実施した。

調査は工事予定区域に3本のトレンチ(南側より1~3トレンチ)を設定し土木重機により表土排除を行い、その後人力によりローム面まで掘り下げるとともに、遺構・遺物の有無の確認を行った。

調査区域の現地表面からローム面までの深度は、1トレンチで約25~30cm、2トレンチで約30cm、3トレンチでは約20~25cmであった。

今回の調査においては、遺構としては近世以降の溝3条が確認された。



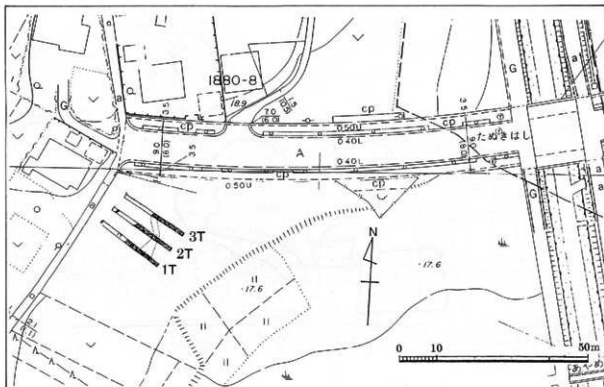
写真7 調査前景観



写真8 トレンチ完掘

【出土遺物】

出土遺物は、縄文時代の土器片が出土しているがいずれも小破片である。



第9図 トレンチ配置図

3 大袋城跡 (平 16 地点)

【立地と環境】

大袋城跡は、館林市東部に位置し、県道板倉初谷・館林線と県道つつじが岡線の交差点の東方約 600m の所に位置している。

城沼とその南の古城沼の二つの低湿地を核とした周辺台地上に分布する遺跡の一つである。古城沼にはその中央部へ向かって南西から半島状に突き出す洪積台地があり、南西側を除いた三方を古城沼及びこれに伴う低湿地に囲まれたこの台地上とその付け根付近には以前より中世城館址の大袋城が推定され、これが大袋城跡である。現在台地上は宅地化された部分が多く、城館としてかつての面影を留めていると思われる部分は限られている。

本遺跡の周辺には、縄文時代から中世に至る遺跡が点在しており、大袋Ⅰ遺跡、大袋Ⅱ遺跡、花山東遺跡、下志柄遺跡 (いずれも縄文時代)、大袋Ⅳ遺跡 (縄文・平安時代)、大袋Ⅲ遺跡、大袋Ⅴ遺跡 (ともに平安時代)、古墳では富士山古墳、下志柄古墳、町谷Ⅰ号墳、中世城館址の青山屋敷跡などがある。このうち昭和 55・56 年度に調査された大袋Ⅱ遺跡では縄文時代の住居跡 10 軒が確認されている。

今回の調査地は、遺跡範囲の中央西に位置し平成 4 年度調査地点の北西にあたる。



第 10 図 周辺の遺跡

【調査の概要】

大袋城跡（平 16 地点）の発掘調査は、花山町字大袋 2298・2、2299-2 地内における宅地分譲に伴う事前確認調査として実施した。

調査は、宅地分譲予定区域に 4 本のトレンチ（西側より 1～4 トレンチ）を設定し土木重機により表土排除を行い、その後人力によりローム面まで掘り下げるとともに、遺構・遺物の有無の確認を行った。

調査区域においては、1 トレンチ（西部分）では現地表面から深さ約 170cm、また 4 トレンチ（東部分）では深さ約 50cm でローム面を確認した。調査地は西方向に傾斜している。また、調査地北側約 3 分の 2 は埋め立てによってローム面が確認できなかった。

今回の調査では、遺構としては、2 トレンチ中央付近で堀跡が出土した。確認面は現地表面から深さ約 1 m のローム面で、それから深さ約 1 m の堀の床面が確認できた。また一部で畝と思われるブリッジ状の遺構（幅 80 cm）も確認できた。堀跡は中世城館の畝堀と確認された。また 2 トレンチ南部では火山灰（As・A）が確認された。（第 11 図参照）



写真 9 調査前景観

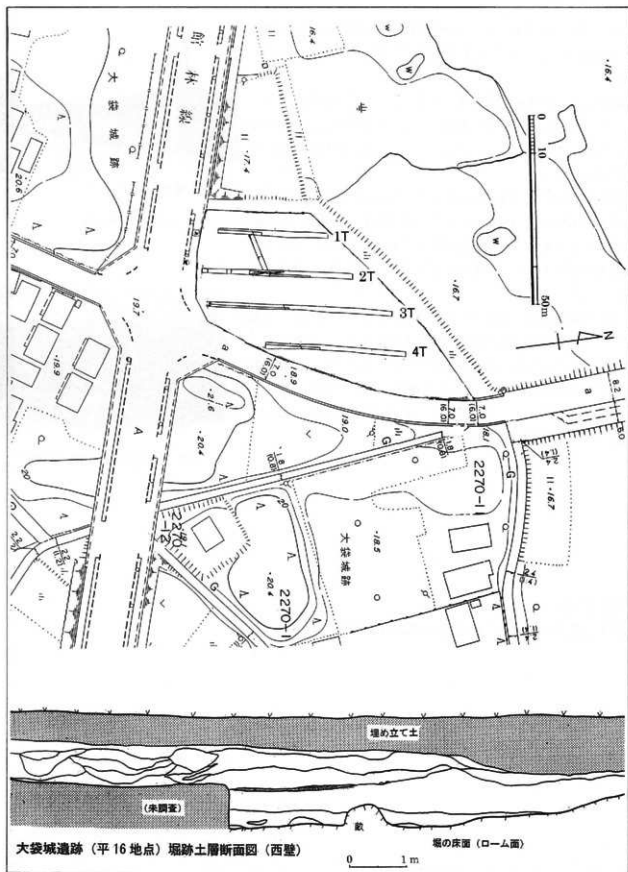


写真 10 遺構確認状況（畝堀）

【出土遺物】

出土遺物としては、内耳土器、陶磁器類が出土している。





第 11 図 トレンチ配置図・遺構確認図

4 北近藤第一地点遺跡（平 16 地点）

【立地と環境】

北近藤第一地点遺跡は、館林市の西南部、東武鉄道小泉線成島駅の南西方向約 2 km に位置する縄文時代から古墳時代にかけての遺跡である。

本遺跡は、苗木町字北近藤および南近藤地内に所在しており、同北近藤地内に存在する「北近藤第二地点」遺跡と区別される。

遺跡地は地形的には邑楽・館林台地南部の沖積地の近藤沼の北側の台地上に位置しており、この近藤沼からのびる深い谷の左岸の台地上に所在しており、遺跡ののる台地は、比較的平坦で広い台地で、遺跡は南に近藤沼を臨み、東側に近藤沼から北にのびる深い谷（近藤川）に、北は同じく近藤沼から北にのびる浅い谷によって区切られている。

本遺跡の周辺には、西に広がる台地上に、小さな谷を隔てて、南近藤遺跡（古墳・平安時代）、北近藤第二地点遺跡（土師時代）がある。また近藤川を隔てた東の台地上に苗木遺跡（古墳・平安時代）、苗木西遺跡（平安時代）がある。

本遺跡の発掘調査はこれまで数回実施されており、古墳時代を中心とした住居址や遺物が数多く検出されている。

今回の調査地は、遺跡範囲の南東に位置し平成 11 年度調査地点の南側にあたる。



第 12 図 周辺の遺跡

【調査の概要】

北近藤第一地点遺跡（平16地点）の発掘調査は、苗木町字南近藤2680-3地内における露天駐車場建設に伴う事前確認調査として実施した。

調査は工事予定区域に7本のトレンチ（西側より1～6トレンチ、北辺に7トレンチ）を設定し土木重機により表土排除を行い、その後人力によりローム面まで掘り下げるとともに、遺構・遺物の有無の確認を行った。

調査区域においては、現地表面からローム面までの深度は、調査地北部で約30～50cm、中央部で約15～20cm、南部で20～50cmであった。また7トレンチでは西部で約60cm、中央部で約40cm、東部で約45cmでローム面を確認した。

今回の調査では、遺構としては2トレンチで住居址3軒、3トレンチで住居址5軒、4トレンチにおいて住居址3軒、5トレンチでは住居址7軒、さらに6トレンチで住居址5軒、そして7トレンチで住居址6軒、調査区全体で合計29軒の住居址（いずれも古墳時代後期）が確認された。

調査地は中央より北にかけて古墳時代後期の住居址が多数確認された。さらに、6トレンチより確認された1号住居址は、周溝状の遺構を伴うものであった。（写真13・図15参照）調査地は古墳時代後期の大集落跡であったと考えられる。



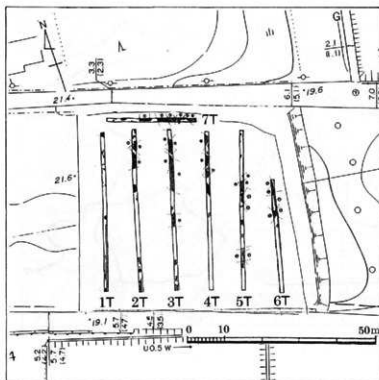
写真11 調査前景観



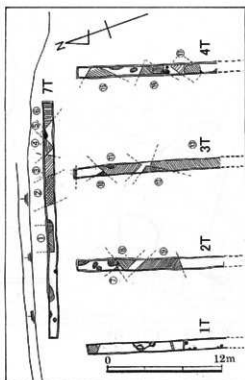
写真12 トレンチ完掘 (7T 東より)



写真13 遺構確認状況 (6T1号住居址)



第13図 トレンチ配置図



第14図 トレンチ平面図

【出土遺物】(写真 14・図 16 参照)

出土遺物は、石器、土師器、須恵器、陶磁器、その他土垂、土玉、鉾滓等が出土した。

遺物 1 (2 トレンチで確認された住居址より出土)

土師器坏である。残存率 75%。口直径 13.5cm、器高 4cm、器厚 0.5cm を計る。口縁は緩やかに外湾し、胴部に段を有して底部に至る。色調表面茶褐色、内面黒褐色。整形は口縁指ナデ、胴部はへら削り。焼成良好。小砂混入。

遺物 2 (5 トレンチ中央付近で確認された住居址より)

出土須恵器の長頸壺もしくはハソウの口縁破片と考えられる。口縁は平らで厚みがある。下端で一旦くびれ、大きく広がり胴部に至るものと考えられる。灰褐色。器厚 0.8cm。焼成良好。小砂を含む。

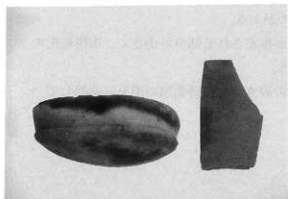
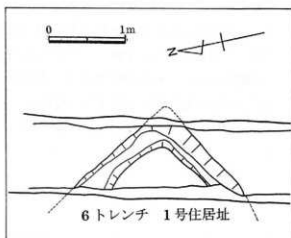
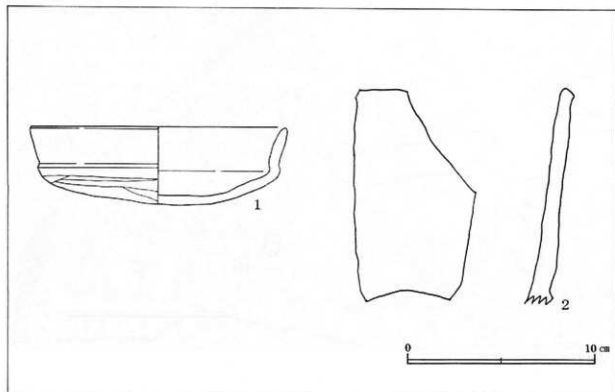


写真 14 出土遺物



第 15 図 遺構確認図



第 16 図 出土遺物実測図

5 栄町遺跡（平16地点）

【立地と環境】

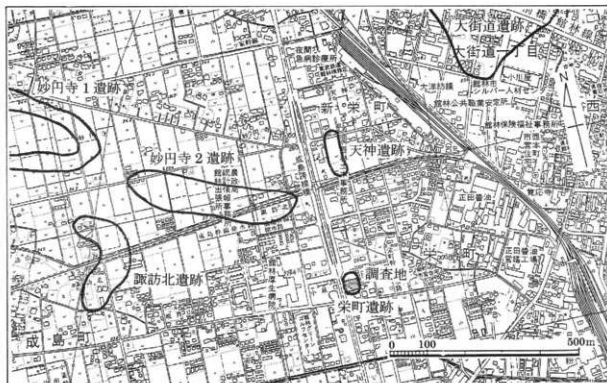
栄町遺跡は、東武鉄道館林駅の北西約700mに位置し、館林市中央部の市街地西側に隣接している。遺跡地の西には国道122号線が南北に通り、北約250mに東武鉄道小泉線が走っている。

地形的には邑楽・館林台地の内奥部であるが、南方約200mにはこの台地を南北に分け東流する鶴生田川が流れ、西側にはこの鶴生田川へ向かって北から開析する小規模な谷が走っている。

本遺跡の周辺には、北に天神遺跡（平安時代）、北東に大街道遺跡（縄文・平安時代）、東には館林城の城下町、南西には二本松遺跡（縄文・平安時代）の、西には妙円寺1遺跡、妙円寺2遺跡、諏訪北遺跡（いずれも平安時代）のがある。

遺跡地周辺は、市街地化が進み、遺構等の遺存が推定される部分が小さく、市街地化の進んだ地域に推定された数少ない遺跡の一つである。

本遺跡の発掘調査はこれまでに例がない。今回の調査地は遺跡範囲の中央に位置している。



第17図 周辺の遺跡

【調査の概要】

栄町遺跡（平 16 地点）の発掘調査は、栄町 198-2、198-5、199-1、199-2 における館林市の計画する館林西部第一中土地地区画整理事業に伴う事前確認調査として実施した。

調査は換地予定区域に 4 本のトレンチ（西側より 1～4 トレンチ）を設定し土木重機により表土排除を行い、その後人力によりローム面まで掘り下げるとともに、遺構・遺物の有無の確認を行った。

調査区域においては、現地表面からローム面までの深度は、1 トレンチで約 15～30cm、2 トレンチで約 15～20cm、3 トレンチでは約 15～30cm、さらに 4 トレンチで約 10～60cm であった。

遺構としては、4 トレンチ中央から 3 トレンチ南部にかけて、中世のものと思われる溝 1 条が確認された。（図 19 遺構確認図）



写真 15 調査前景観



写真 16 トレンチ完掘（3T 北より）

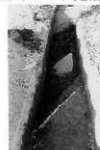
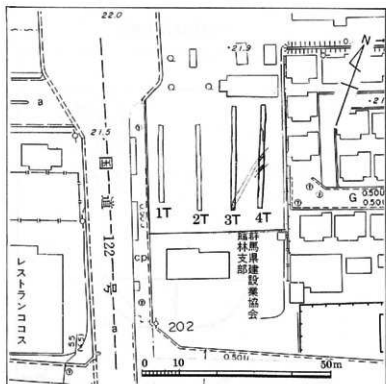
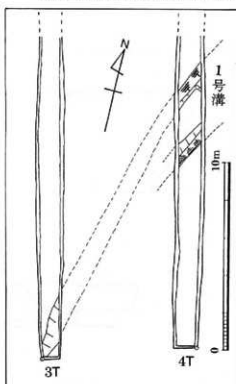


写真 17 遺構確認状況（4T 1号溝）



第 18 図 トレンチ配置図



第 19 図 遺構確認図

【出土遺物】(写真 18・図 20 参照)

出土遺物としては、縄文土器片、灯明皿、焙烙(内耳土器)等が出土した。

遺物 1

内耳の焙烙の破片である。口径は 6.6cm、現高は 5.2cm を計る。器厚 0.9cm、口縁は平らで、緩やかに外半する。内部にブリッジ状の耳が付く。色調は黒褐色で、焼成は良好である。

遺物 2

土師質の灯明皿である。完形で出土した。口径 6.4cm、器高 2.3cm、器厚 0.6cm を計る。色調は乳白褐色を呈し、焼成は良好。底部に糸切り痕がみられる。

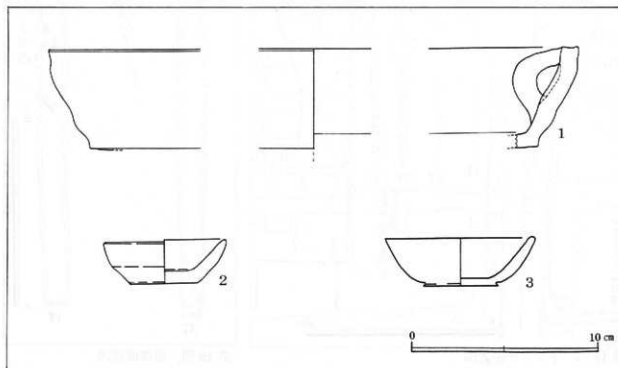
遺物 3

土師質の灯明皿である。残存率は 60% である。口径 7.8cm、器厚 0.5cm を計る。底部は高台状になっている。遺物 2 同様に底部に糸切り痕がみられる。

遺物 1～遺物 3 は、いずれも 4 トレンチ 1 号溝で確認された溝から出土している。



写真 18 出土遺物



第 20 図 出土遺物実測図

6 諏訪北遺跡（平 16 地点）

【立地と環境】

諏訪北遺跡は、東武鉄道小泉線成島駅の東約 700m に位置する。

遺跡地は、邑楽・館林台地の西部で、同台地を大きく開析する城沼の支谷を東方に臨む台地上に位置している。遺跡地の現在の標高は約 24.5m で、周辺の低地（多々良沼）との標高差は約 4m である。

本遺跡の周辺には、妙円寺 1 遺跡（平安時代）、妙円寺 2 遺跡（平安時代）、牛島遺跡（平安時代）所在している。平成 15 年度に妙円寺 1 遺跡で発掘調査が行われたが、特に際立った遺構および出土遺物は確認されなかった。

本遺跡の発掘調査はこれまでに例がなく、今回の調査地は遺跡範囲の中央部に位置している。



第 21 図 周辺の遺跡

【調査の概要】

諏訪北遺跡（平16地点）の発掘調査は、成島町字諏訪北321-5における個人住宅建築工事に伴う事前確認調査として実施した。

調査は工事予定区域に2本のトレンチ（北側より1～2トレンチ）を設定し土木重機により表土排除を行い、その後人力によりローム面まで掘り下げるとともに、遺構・遺物の有無の確認を行った。

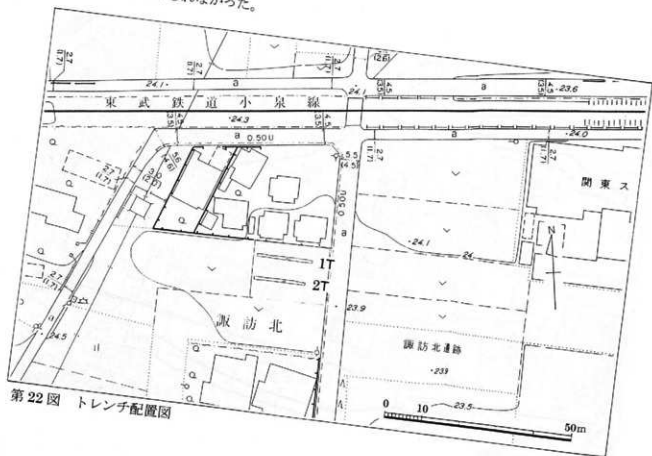
調査区域においては、現地表面からローム面までの深度は、1トレンチ、2トレンチともに約15～50cmであった。今回の調査では、遺構は確認されなかった。



写真19 調査前景観

【出土遺物】

出土遺物はみられなかった。



第22図 トレンチ配置図

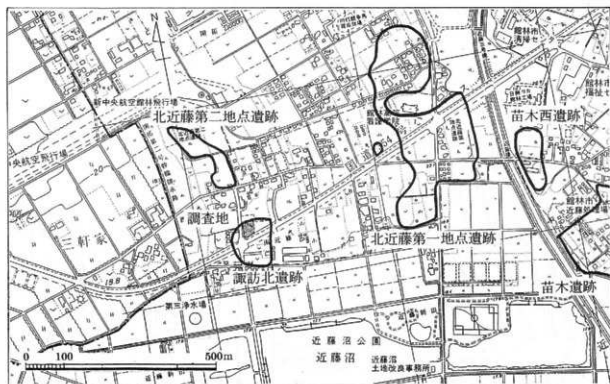
7 南近藤遺跡（平16地点）

【立地と環境】

南近藤遺跡は、館林市南西部、東武鉄道小泉線成島駅の南西約2.5kmに位置する。遺跡地は地形的には、邑楽・館林台地の南縁にあたり、近藤沼を形成する開析谷の北岸の台地西部に立地している。西側と南側には近藤沼からの低地が広がる。遺跡付近の標高は約20mで、低地との標高差は約3mである。

本遺跡の周辺には、近藤沼周辺の台地上に、近藤障子遺跡（縄文・古墳時代 ※破壊）、伝右エ門遺跡（縄文・古墳時代）、北小袋遺跡（縄文）、小袋遺跡（縄文・古墳・平安時代）、苗木西遺跡（平安時代）、苗木遺跡（古墳・平安時代）、北近藤第一地点遺跡（縄文・古墳・平安時代）、北近藤第二地点遺跡（土師時代）等が分布する。

調査地ではこれまでに数回調査が行われており、古墳時代の住居址等が確認されている。今回の調査地は、平成8年度調査地点の西隣地である。



第23図 周辺の遺跡

【調査の概要】

南近藤遺跡(平16地点)の発掘調査は、苗木町字南近藤2599-41、2599-78地内における病院建設工事に伴う事前確認調査として実施した。

調査は工事予定区域に6本のトレンチ(東側より1~6トレンチ)を設定し土木重機により表土排除を行い、その後人力によりローム面まで掘り下げるとともに、遺構・遺物の有無の確認を行った。

調査区域においては、現地表面からローム面までの深度は、現地表面からローム面までの深度は、1トレンチで約20~30cm、6トレンチで約20~40cm、6トレンチで約20~30cmであった。

今回の調査では、遺構としては1トレンチから住居址1軒、2~3トレンチにかけて住居址1軒、4トレンチ部から住居址1軒、調査区域全体では合計3軒住居址(いずれも古墳時代中期)が確認された。

調査地は古墳時代中期の集落跡であったと思われる。

【出土遺物】(写真22・図25参照)

出土遺物は、縄文土器把手や土師器片等が数点出土している。

遺物1

縄文土器深鉢の口縁付近に付く把手である。色調は灰茶褐色。焼成良好。縄文時代中期の所産。1トレンチから出土している。



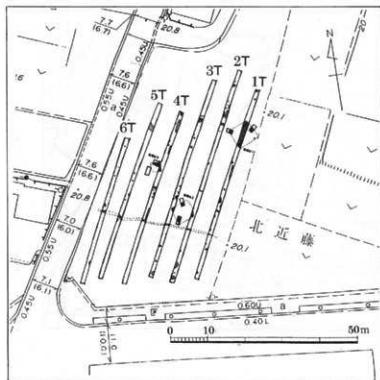
写真20 調査前景観



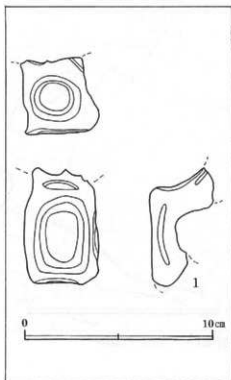
写真21 トレンチ完掘(1T北より)



写真22 出土遺物



第24図 トレンチ配置図



第25図 出土遺物実測図

抄 録

ふりがな	たてばやししないいせきはつつちようさほうこくしよ							
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書							
副書名	_____	巻次	_____					
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書		シリーズ番号	第40集				
編集者名	岡屋英治		編集機関	館林市教育委員会				
所在地	〒374-0018 群馬県館林市城町1-1							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所取遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
下志柄	桶町字下志柄	10207	74	—	—	20040530 20040620	1,858 m ²	運送会社倉庫
笹原	堀工町字笹原	10207	101	—	—	20040711 20040719	4,744.7 m ²	道路
大袋城跡	花山町字大袋	10207	69	—	—	20040802 20040817	1,556.51 m ²	公園整備
北近藤第一地点	苗木町字南近藤	10207	53	—	—	20040830 20040910	3,052 m ²	露天駐車場
笹原	堀工町字法正谷	10207	101	—	—	20050124 20050125	733 m ²	農地埋立
栄町	栄町	10207	30	—	—	20050206 20050217	1,370 m ²	土地区画整理
諏訪北	成島町字諏訪北	10207	25	—	—	20050209 20050210	500 m ²	個人住宅
南近藤	苗木町字南近藤	10207	91	—	—	20050302 20050312	2,398 m ²	病院
遺跡名	種別	時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
下志柄	包蔵地	縄文時代		溝		土器片等		
笹原	包蔵地	縄文・平安時代		溝		土器片等		
大袋城跡	中世城館址	縄文・平安時代		畝堀(中世)		陶磁器等		
北近藤第一地点	包蔵地・集落跡	縄文・古墳・平安時代		古墳時代住居址		土器片等		
笹原	包蔵地	縄文・平安時代		溝		土器片等		
栄町	包蔵地	平安時代		溝		焙烙、灯明皿等		
諏訪北	包蔵地	平安時代		なし		なし		
南近藤	集落跡	古墳・平安時代		古墳時代住居址		土器片等		

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書 第40集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発 行 館林市教育委員会

印 刷 所 田部井印刷有限会社

発行年月日 平成17年3月31日



文化財庁 シンボルマーク
遺跡の文化と歴史をみなおそう